

氏 名	城 戸 国 利 き ど く に と し
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 737 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	妊 娠 中 毒 症 対 する 低 カ ロ リ ー 療 法

論文調査委員 (主 査) 教 授 内 野 治 人 教 授 奥 田 六 郎 教 授 西 村 敏 雄

論 文 内 容 の 要 旨

1. 低カロリー療法開発の目的

妊娠中毒症（以下単に中毒症と略）とは、妊婦または褥婦に高血圧、浮腫、たん白尿のいずれか一つ以上出現した時につけられる病名である。中毒症は、わが国妊産婦死亡原因中、毎年第一位にランクされる程、母体の生命と健康の脅威であるが、児にとっても、胎児死亡、新生児死亡、未熟児出生などの主要原因をなすものである。中毒症の治療には、従来より、母体の高血圧、浮腫、たん白尿などの症状改善を指標にして、利尿降圧剤、降圧剤、抗痙攣剤などが盛んに使用されてきたが、中毒症妊婦を前記のような薬物に依存して治療していると、母体の症状や経過からは説明困難な胎児死亡、新生児死亡に遭遇することが少なくなかった。著者はその原因が中毒症治療のために母体（妊婦）に投与される薬物にあると考え、できる限り薬物を用いずに中毒症妊婦を管理する方法として低カロリー療法を創始した。

2. 低カロリー療法とは

低カロリー療法とは、中毒症妊婦（主として妊娠後半期）の摂取総熱量を大幅に制限して「低カロリー療法適用中は、妊婦の体重が次第に減少することはあっても少なくとも増加しない」ようにする食餌療法である。日本人妊婦であれば、比較的安静の状態で一日1200カロリー以下にすればこの目的にはばかなうことになる。現在は中毒症の症状と経過に応じて、2000～1200カロリー/日の範囲で加減している。

3. 効 果

昭和44年5月より昭和51年12月末までの期間中、京大病院産科において分娩まで1週間以上（最長76日間）低カロリー療法を行った妊婦は78例であり、その出生児は双胎1組を含むので79例であった。これらの妊婦は全例分娩を終え無事退院した。出生児79例中、1例は、分娩第一期に胎盤早期剝離発生し、出産直前に死亡したが、残り78例は無事に出生し、今日までの生後発育は一応順調といえる。特筆すべきは、母体の症状経過よりみて説明困難な胎児および新生児の死亡は1例もなかったことである。

4. 胎児の発育

分娩まで3週間以上低カロリー療法を行った38例の妊婦より生れた39例の出生児の出生時身長はほぼ正

常、出生時体重は正常よりも約10%小さかった。生活力には異常を認めなかった。

5. 妊婦に出現する変化

低カロリー療法を開始すると、①浮腫は早いものでは数日内に消失した。②軽度のたん白尿は消失した。③高血圧ははじめゆるやかな下降傾向が続き、その後陣痛の始まる数日～数週前より次第に上昇傾向をとるものが多かった。④体重、基礎代謝量、尿中非たん白性窒素は次第に減少した。⑤呼吸商は低下した。⑥血中成分量では血清たん白減少その他種々の変化がみられたが、重篤なものはなかった。

6. 妊婦の活力その他

強度の総熱量制限でも、妊婦の活力が衰える印象はうけなかった。分娩所要時間には短縮傾向がみられ、分娩時出血量も減少傾向を示した。

7. 低カロリー療法の意義

中毒症の治療上、安静を守らせることが、基本的に最も重要であるが、安静とは消費エネルギーを減少させることである。安静に低カロリー療法を併用すると、消費エネルギーは更に一層減少させることができる。換言すれば「安静の強化」が中毒症に効果ある理由の一つと推定している。

8. 結 論

現時点では、低カロリー療法は最も合理的な中毒症妊婦管理法と考えている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

後期妊娠中毒症（以下中毒症と略）は周産期死亡（妊娠第8月以後の後期死産と、生後1週未満の早期新生児死亡を合わせたもの）の主要原因であるが、著者は、その周産期死亡を減少させるには、中毒症妊婦をできる限り薬物を使用しない方法で管理すべきであると考え、「低カロリー療法」と呼ぶ食餌療法を創案し、共同研究者らとともに京大病院産科において過去10年間実施した。本法は、食塩制限とともに大幅な熱量制限（200～1200カロリー/日）を基本とする食餌療法であって、「本法適用中は、妊婦体重が減少することはあっても、少なくとも増加しない」点が特徴である。従来の薬物依存の中毒症妊婦管理では、母体の症状や経過からは説明困難な周産期死亡が稀ならず発生したが、本法実施以来、京大病院産科ではそれが全くみられなくなった。本法を長期間適用しても、妊婦に重大な障害は発生せず、またそれらの妊婦より生れた出生児の平均的表現としては、「背丈はナミでややヤせているが元気のいい子」と言える、本法は、従来の薬物依存の方法よりも、胎児のことをも考慮した中毒症妊婦管理法として勝れたものと考ええる。本療法は妊娠中毒症に賞用さるべき独創的新療法であるので、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。